



THE DAILY ENGINEERING & CONSTRUCTION NEWS

# 日経建設工事新聞

2018年(平成30年) 7月25日水曜日

第19475号

発行所 日経建設工事新聞社  
〒108-0071 東京都港区東新橋2-2-10  
電話03(3433)7161 http://www.den.co.jp/  
◎日経建設工事新聞社 2018  
〒108-0071 東京都港区東新橋2-2-10  
電話03-3433-7161 mail:ed@den.co.jp  
編集 電話03-3433-7162 mail:sa@den.co.jp  
印刷 電話03-3433-7164 el:sv@den.co.jp

かつて国立公園や国定公園にあったダム湖は、審議会でも素晴らしい自然環境だと高く評価された。このことは空を飛んで、はるばるシベリアなどからやって来る渡り鳥もよく知っていた。

ダムが竣工し湖が出現してしばらくすると、ダム湖を取り囲むように鳥獣保護区が指定された。これは現在でも多かれ少なかれ同じである。ダム湖は野鳥の楽園で生態系豊かな日本が誇り後世に伝えるべき環境のシンボルだった。しかし昨今、ダムは環境破壊のシンボルにされてしまった。いづろからそつなつたのか。そしてなぜなのか。

一般の人が思い描くダムは堤体という構造物だけでなく、広い水面を誇る湖水と水辺の方が圧倒的に多いのではないか。ダム湖を見て最初に気になるのは、湖辺にある帯状の裸地だろう。裸地は誰が見ても痛々しい。お世辞にも美しいとはいえず、環境破壊といわれても仕方がない。

帯状裸地はどうしてできるのか。ダム湖は貯水空間を有効に使うために、洪水

## 明治維新150年と治水の歴史

竹林 征三

### 〈21〉美しいダム湖を目指して

期、非洪水期などに分けて制限水位を設け、その水位まで短い日数で降下させる。急激な水位変化に貯水池斜面の植生が追従できず、結果的に裸地が形成される。さらに表土までが流出してしまえば、復元はよいよ難しくなる。

裸地ができないようにしたいと思ひ、水位変動に追

随できる植生をいろいろ研究したが、やはり難しい。それならば、水位を急速に低下させる貯水池運用を

変成して、ダムは、今後再開発などで

たどり着く。制限水位方式や予備放流方式をやめ、強制的水位降下をしないオー

ルサーチャージ方式にすれば良いのだ。

て、先人のやってきたことを引き継ぐ部署がすっかりなくなった。分からないことは、ことあるごとに先人にいろいろ聞いたが、それも雲散霧消してしまった。

自然界では大洪水や大濁水もある。生態系はそれに順応していくが、人為的な水位の急降下などには追従できない。ダム湖は単なる水をためる容器ではない。効率を過度に追求した貯水池運用は避けたいものである。ダム貯水池運用は強制的水位降下をしない方が、トータルの環境経済論から見て良いことに間違い

ない。

〈参考文献〉『物語日本の治水史』鹿島出版会

（富士常葉大学名誉教授、風土工学デザイン研究所会 長）

週1回掲載